

# 慣用句の透明度と親密度の関係について

## ー日本語母語話者と学習者判断の比較からー

陳 雯

キーワード：慣用句、親密度、透明度、母語話者と学習者の比較

### 1. はじめに

慣用句とは、二語以上から構成され、構成成分の結びつきが固定しており、全体でまとまった意味を表す表現のことである（宮地 1985, 石田 2004）。例えば、「足を引っ張る」という日本語表現の文字通りの意味は「人の下肢を自分のほうへ引き寄せる」であるが、全体としては「人の邪魔をする」という慣用句的な意味を表す。

慣用句は全体でまとまった意味を持ち、個々の構成要素の意味から慣用句的な意味を推測しにくいという点において特徴的であり、言語学習者にとって一つの難点であると考えられるため、慣用句の習得に関する研究は数多くされてきた。先行研究によると、慣用句の透明度と親密度は学習者の理解プロセスに影響する二つの重要な要因であることが分かり、透明度の高い慣用句と親密度の高い慣用句は低いものより理解・解釈しやすいことが明らかにされている（Nippold & Rudzinski 1993, Nippold, Taylor, & Baker 1996, Aljabri 2013 等）。しかし、従来の研究において、この二つの要因を独立しているものとして捉えることが多く、親密度と透明度の関係に対する議論は十分にされていなかった。Nippold & Rudzinski (1993) と Keysar & Bly (1995) は英語慣用句を用いて両者の関連性について考察しているが、それぞれは異なる結果を示した。先行研究の異なる結果をどのように解釈すべきか、慣用句の透明度と親密度の間に関連性があるか否かについて、更なる検討が必要であると考えられる。

本稿では、日本語慣用句を用いて、日本語母語話者と中国人日本語学習者を対象に、日本語慣用句に対する透明度判断タスク及び親密度判断タスクを行うことによって、慣用句の透明度と親密度の間に関連性があるか否かについて検討し、母語話者と学習者の相違を明らかにする。

### 2. 先行研究と本稿の仮説

本節ではまず慣用句の透明度と親密度の定義について述べる。次に本稿の目的と関連する三つの先行研究を取り上げ、それぞれの結果をまとめた上で問題点を指摘し、本稿の仮説を提示する。

## 2.1 慣用句の透明度と親密度とは

### 2.1.1 慣用句の透明度

英語慣用句に関する先行研究において、透明度は文字通りの意味と全体の意味の関連性のことであり、文字通りの意味と全体の意味の関連性が高いものは透明度が高く、その間の関連性が低いものは透明度が低いと定義されている（Nippold & Rudzinski 1993 ; Keysar & Bly 1995 ; Ishida 2009 ; Aljabri 2013）。例えば、英語慣用句 *go by the book* の文字通りの意味－「料理本の指示に従う」は全体の意味－「ルールと規則に従う」と密接な関係を持っているため透明度が高いと判断される。*keep one's shirt on* の文字通りの意味－「シャツを着続ける」は全体の意味－「冷静なままで過激な反応をしない」と関係を持たないため透明度が低いと判断される（Nippold & Taylor 2002）。

一方、日本語慣用句に関する研究においては、管見の限り透明度という用語は一般に使用されていないが、伊藤（1999）は以下のように述べている。

「馬の骨」のような、「家柄、生まれ育ちなど素性のわからない者」という慣用句全体の意味と慣用句の構成要素として用いられている「馬」や「骨」の意味との間に、何らかの連想関係の認められないような慣用句は、イディオム性が高い。一方、「手を汚す」のような、構成要素本来の意味と慣用句的な意味との間に関連性を認めることができるような慣用句はイディオム性低い。

伊藤（1999:186）

伊藤（1999）で述べているイディオム性は慣用句の文字通りの意味と慣用句全体の意味の関連性を指している点においては、英語慣用句の透明度という概念に類似していると考えられるが、両者には違いもある。伊藤（1997）では、「イディオム性」は言語学者が言語学的な立場で捉える概念であり、慣用句の文字通りの意味と慣用句全体の表す意味の関連性を言語的な意味関係、文化的・社会的背景から探ることに焦点を当てている。それに対して、「透明度」は言語学者の視点から判断するものではなく、ある言語の話者がその言語にある慣用句の表す文字通りの意味と慣用句的な意味を見た際に、両者の間の関連性をどの程度感じるかによって判断するものである。

本稿においては後者の立場をとり、言語話者が慣用句の文字通りの意味と慣用句的な意味の関連性をどのように捉えているかに着目し、慣用句の透明度を「言語話者によって判断される文字通りの意味と全体の意味の間の関連性」という定義に基づいて論じていきたい。

### 2.1.2 慣用句の親密度

親密度（familiarity）は一人の言語話者がある表現を見たり、聞いたりする頻度、またはその人がある表現をどの程度知っているかを表す概念である。Titone & Connine（1994）

は 171 個の英語慣用句の親密度を調べるために、英語母語話者を対象に、それらの慣用句をどれぐらいの頻度で見たり聞いたりするか、及びどの程度それらの慣用句の意味を知っているかを共に 7 段階評価タスクで調査を行った。その結果、二つのタスクの結果の間に強い相関があることが分かり、親密度の判断の指標を見たり聞いたりする頻度、またはどの程度意味を知っているかのどちらかにすることができると指摘している。

ところが、親密度と近い概念に使用頻度 (frequency) という用語を用いる研究もあるが、使用頻度はある表現がどれくらい一つの言語に現れるかを示すのに対し、親密度は一人の言語話者がある慣用句に遭遇する頻度のことを指すため、全く同じ概念ではない。ただし、使用頻度の高い表現は頻度の低い表現よりも親密度もが高いと考えられるため、この二つの概念は対立的なものではなく、類似していると思われる (Liu 2008: 77-78)。

本稿では Nippold & Rudzinski (1993)、Aljabri (2013) を参考に、慣用句の親密度を「一人の言語話者がある慣用句に遭遇する頻度のことである」と定義している。

## 2.2 Nippold & Rudzinski (1993) と Nippold & Taylor (2002)

Nippold & Rudzinski (1993) は二つの実験を行った。実験の一つ目は英語慣用句に対する透明度と親密度を判断するもので、二つ目は慣用句の理解と解釈を測るためのものである。二つ目の実験は本稿の目的と直接的に関係を持たないため、ここでは一つ目の実験のみ見ていく。この実験において、彼らは英語母語話者である高校生と大学生 20 人ずつを対象に、100 個の英語慣用句について 5 段階の親密度評価タスク (1= *I have heard or read it many times before*; 5= *I have never heard or read it before*)、及び 3 段階の透明度判断タスク (1= *closely related*; 3= *not related*) を行った。両グループにおいて二つのタスクの平均を比較した結果、高校生のグループに比べ、大学生のグループは慣用句に対する親密度が高いことが分かり、そして透明度が低いと判断されていることが分かった。大学生グループによる透明度判断が低かった理由として、Nippold & Rudzinski (1993) は年齢の増長につれ、大学生の慣用句の知識が深くなり、なおかつ頭の中で慣用句の表現形式と慣用句の意味の間のリンクも一段と固定されているため、文字通りの意味へのアクセスがしにくくなったと考察している。

一方、Nippold & Taylor (2002) は Nippold & Rudzinski (1993) の研究成果を拡大することを目的として、同じ方法を用いて小学生 50 人と高校生 50 人を対象に、20 個の英語慣用句について 5 段階の親密度評価タスク及び 3 段階の透明度判断タスクを行った。両グループにおいてこの二つのタスクの平均を比較した結果、高校生グループの親密度は小学生グループと比べ有意に高かったが、透明度判断において二つのグループの間に有意な差が見られなかった。更に、両グループともに、親密度評価タスクと透明度判断タスクの結果の間に相関関係が見られなかった。Nippold & Rudzinski (1993) において、年齢の増長に連れて (高校生と大学生の比較から) 慣用句の透明度判断が低くなるという結果が示されたのに対して、Nippold & Taylor (2002) においては年齢の増長 (小学生と高校生の比

較から) による透明度判断の差が見られなかった。後者はその理由を明らかにするために、今後は小学生、高校生と大学生の比較を通して考察するべきであると述べている。

以上の二つの研究には慣用句の選出、タスクのデザインに一貫性が見られ、今後の研究にとって大いに参考になるが、二つの問題点が考えられる。まず、Nippold & Taylor (2002:386) は抽出された 20 個の慣用句は子供にとって親密度にバリエーションがあると予測される、と述べているが、項目ごとに計算された親密度評価の平均点から見れば、予測通りに小学生グループは、20 個の慣用句に対して親密度を高く評価しているものもあれば低く評価しているものもある。それに対して、高校生グループにおける親密度の平均点は全ての項目において 3 以下であったため、慣用句の親密度にバリエーションが少ない。親密度と透明度の相関関係を明らかにするには、年齢にかかわらず、全ての協力者にとって親密度の低いものから高いものまで、よりバリエーションのある慣用句を対象に調査する必要があると考えられる。また、Nippold & Rudzinski (1993) は透明度と親密度それぞれについて比較分析を行っているが、両者の相関については考察していない。透明度と親密度の関連性を考察する際は、この二つのタスクを別々に分析するのではなく、両者の相関についても分析しなければならない。

## 2.3 Keysar & Bly (1995)

Keysar & Bly (1995) は二つの実験を行ったが、ここでは二つ目の実験のみ見ていく<sup>1</sup>。二つ目の実験において、彼らはまずバイアスのかかる文脈を通して、親密度の低い 12 個の英語慣用句<sup>2</sup> (*to have someone dead to rights*) の本来の意味 (*to catch someone in the act, unquestionably guilty*) またはそれと反対になる意味 (*to convict someone in spite of unquestionable innocence*) のいずれかを 60 人の大学生 (英語母語話者) に学習させた後に、協力者にその中の 2 個の慣用句を用いて 0 回/1 回/2 回文を作らせた。その次に、協力者に個々の慣用句の本来の意味とそれと反対の意味の両方を提示し、それぞれの意味が持つ透明度について調査を行った。結果、学習した意味のタイプ (本来の意味かそれと反対の意味) にかかわらず、協力者は慣用句について、学習した意味の透明度は学習しなかった意味の透明度に比べて透明度を高く判定していることが分かった。また、使用頻度が上がるにつれ、学習しなかった意味の透明度が有意に減る一方、学習した意味の透明度は使用頻度によって変わらないことも分かった。

この研究において、協力者が学習した意味の透明度を高く判断する理由として、慣用句の意味を学習する際に、協力者は文字通りの意味と慣用句全体の意味の関連性について考え、そこから自分が見出した関連性に基づいて透明度を判断しているためであると述べられている。また、ある慣用句の使用頻度が上がるに連れ、その慣用句が持つ慣用的な意味

<sup>1</sup> Keysar & Bly (1995) における一つ目の実験は慣用句の意味学習に関するもので、本稿の目的と直接な関係を持たないと考えられ、その紹介を割愛する。

<sup>2</sup> 実験対象と慣用句は英語慣用句辞典や 19 世紀の英小説に見られるが、現代英語話者にとっては親密度の低いものである。この実験では協力者が慣用句の本来の意味を知らないことを前提としている。

がより定着していき、それと反対になる意味と文字通りの意味との間のリンクが薄くなり、透明度判断は低くなっていくことが考察された。

ただし、この実験に使用された慣用句は全部で 12 個であり、使用頻度の要因を検討する際、協力者が本来の意味、またはそれと反対になる意味に基づいて 0 回、1 回、2 回文を作成するという三つの条件に用いられた慣用句の数は僅か 2 個ずつという問題がある。より多くの慣用句を用いることによって実験の結果を検証することが必要だと考えられる。更に、実験で設定された 0～2 回の使用頻度は日常生活における慣用句の使用頻度と比べると、非常に低いため、言語話者にとって慣用句の親密度が透明度の判断に影響するか否かを探るためには使用頻度のより高いものも考慮する必要がある。なぜならば、この実験の結果からみると、協力者はある慣用句の意味を学習すれば、その意味と文字通りの意味との関連性は定着される一方、学習した意味の反対の意味と文字通りの意味の関連性は徐々に薄くなっていくが、前者は定着されていくのではなく、変化のプロセスが後者より遅い可能性があるのではないか。もしそうであれば、使用頻度を増やすことによって学習した意味の透明度の変化も見られると考えられる。本稿では以上の問題点を踏まえ、透明度と親密度においてバリエーションが豊富な慣用句を選出し、より適切な解析方法を用いて分析を行う。

## 2.4 本稿の仮説

2.2 と 2.3 で述べた先行研究において異なる結果が示されている。Nippold & Rudzinski (1993) では、協力者の年齢が上がるに連れ（高校生と大学生の比較）、慣用句の透明度判断が低くなるという結果が示されたのに対し、Nippold & Taylor (2002) では協力者の年齢の差（小学生と高校生の比較）による透明度判断の違いが見られなかった。また、Keysar & Bly (1995) は慣用句の文字通りの意味と慣用句的な意味の間の関連性は学習によって見出され、その後定着すると考察している。本稿では以上の先行研究における結果の相違点を異なる習得プロセスによる違いだと仮定する。つまり、Nippold & Rudzinski (1993) 及び Nippold & Taylor (2002) の協力者は主に日常生活において慣用句を習得しているが、Keysar & Bly (1995) の協力者は実験が行われる間に慣用句の意味を学習しており、限られた時間の中で慣用句の意味を覚えているという点において日常生活における語彙の学習と大いに異なる。このことから、三つの研究の協力者は全員英語母語話者で共通しているが、その性質は異なっていると考えられる。本稿では、それぞれの実験に参加した協力者の性質の違いは、慣用句の意味を意図的に学習しているのか、または自然に習得しているのかにあるのではないかと考える。

Schmitt (2000:120) によると、語彙の習得には二つのアプローチがあり、一つは学習したい語彙の情報に集中し、努力することによって短い間で語彙を習得するというアプローチで、もう一つは日常のコミュニケーションにおいて現れる語彙が繰り返され、時間が経つにつれて徐々に身につくというアプローチである。前者は意図的なものであり、後者は

偶発的なものである。更に、語彙を意図的に学習する際に、意味情報はより注目され、理解プロセスにおいてより深く処理される。慣用句は一つの語彙と同じように全体で慣用句的な意味を表すため、慣用句の学習は語彙学習と共通している。従って、Keysar & Bly (1995) の協力者は教室環境や実験環境において慣用句を学習している点で語彙を意図的に学習する場合と類似していると考えられる。協力者は慣用句の構成要素の意味情報に注意を与えることによって、文字通りの意味と慣用句的な意味の関連性を見出し、学習した慣用句の意味の透明度を高く判断する。

本稿では、以上の二つのプロセスを「意図的学習」と「自然習得」として区別する。ある慣用句の意味を意図的に学習する場合、頭の中で文字通りの意味と慣用句的な意味の関連性を見出そうとするプロセスが促され、そしてその表現に遭遇する頻度が上がることによって、関連性を見出すプロセスが繰り返され、慣用句の透明度も高くなると予測できる。それに対して、自然習得の場合、慣用句の意味を深く処理しないため、文字通りの意味と慣用句的な意味の関連性を見出そうとするプロセスが繰り返されず、透明度が変わらない可能性がある。

本稿では第二言語学習者と母語話者を対象に、両者を比較することによって意図的学習と自然習得における慣用句の親密度と透明度の関連性を検証したい。勿論、第二言語学習者にも自分の国で外国語を勉強する人や、海外へ留学に行つて第二言語の環境の中で言葉を勉強する人もいるが、本稿で対象とするのは前者で、主に教室環境の中で第二言語を勉強する学習者である。Keysar & Bly (1995) において慣用句の使用頻度が要因となっているが、使用頻度と親密度は対立しているものではなく、類似する概念であると考えられる。親密度はある表現に遭遇する頻度のことを指しており、使用頻度が高くなれば親密度も高くなると考えられる。この研究において協力者が学習した意味の透明度は使用頻度によって変わらない結果が示されたが、2.3 で述べたように、文字通りの意味と学習した慣用句の意味の間のリンクに変化が起こるプロセスが遅い可能性があり、慣用句に遭遇する頻度がより高くなればその影響も見ることができるだろう。

以上を踏まえ、本稿は以下のように仮説①と②を立てる。

- ① 教室環境において第二言語を勉強する学習者の慣用句習得は意図的学習であるため、慣用句の親密度が上がるにつれ、透明度も高くなる。
- ② 母語話者の慣用句習得は自然習得であるため、親密度が高くなっても、透明度は高くない。

### 3. 本稿の目的と研究方法

#### 3.1 研究目的

本稿の目的は日本語母語話者と中国人日本語学習者を対象に、日本語慣用句に対する透明度判断及び親密度判断を行うことによって、慣用句の透明度と親密度の間に関連性

があるか否かについて検討し、①教室環境において第二言語を勉強する学習者の慣用句習得は意図的学習であるため、慣用句の親密度が上がるにつれ、透明度も高くなる、②母語話者の慣用句習得は自然習得であるため、親密度が高くなっても、透明度は高くない、という二つの仮説を検証することである。

## 3.2 調査協力者

本稿では成人日本語母語話者と中国語を母語とする日本語学習者を対象に比較を行う。Nippold & Rudzinski (1993) によると、母語話者の場合、年齢による経験の差は慣用句の親密度判断に影響を及ぼすとされている。本稿は母語話者グループの協力者を選出する際に、年齢に幅があることを考慮に入れる。一方、第二言語学習者は母語話者と異なり、短期間において大量の語彙を意図的に学習していると考えられ、本稿では学習者のグループにおいて年齢の幅よりも学習期間の長短、及び言語能力の高低のほうが親密度に影響すると思われる。

従って、本調査は日本語母語話者 47 人（19～48 歳，平均年齢＝34）及び中国語を母語とする日本語学習者 46 人（19～25 歳，平均年齢＝21 歳）を集めた。日本語母語話者は仕事依頼サイト Lancers<sup>3</sup>を通して集め、協力者には大学生、会社人、フリーター及び主婦がいた。学習者の募集方法は、寧波大学に在籍の先生を通して人数を集めた。その協力者たちには、オンライン調査依頼サイト問卷星（wen juan xing<sup>4</sup>）でアンケートに回答してもらった。中級学習者は二年間日本語を勉強しており、全員 N1 未取得であるが、上級学習者は三年間以上日本語学習経験があり、全員 N1 を取得している。母語話者と学習者は両方オンラインのサイトを通してアンケートの内容を見て回答するという点において共通している。

## 3.3 調査材料

### 3.3.1 慣用句の選出

本稿は『三省堂 故事ことわざ・慣用句辞典 第二版』（2010）及び『慣用句・故事ことわざ・四字熟語 使いさばき辞典』（2014）の 2 冊から「舌が肥える/耳に入る/腹が立つ/目を通す/…」などの 45 個の日本語慣用句を選出した。慣用句の選出は筆者の主観的判断によるが、選出の際に①学習者の第一言語である中国語に類似する表現がないこと、②慣用句の透明度については、透明度の高いものから低いものまでバリエーションがあること、③母語話者と学習者の両方にとって慣用句の親密度も高いものから低いものまでバリエーションがあること、以上の三つのことを考慮に入れた。全ての慣用句項目に関しては付録を参照されたい。

---

<sup>3</sup> <http://www.lancers.jp>

<sup>4</sup> <http://www.sojump.com>

<sup>5</sup> 慣用句の定義について、本稿は二語以上から構成され、構成成分の結びつきが固定しており、全体でまとまった意味を表す表現のことを言うが、「力を尽くす」のような、「力」の文字通りの意味がそのまま慣用句の意味として残っていると思われる表現もある。ただし、「力を尽くす」は慣用句として「精一杯の努力をする」というまとまった意味を持つため、本稿の定義を満たしていると考えられる。

### 3.3.2 意味の定義

協力者に慣用句の透明度について判断させる際に、慣用句の文字通りの意味及び全体の意味を提示する必要があるため、まずは 3.3.1 で選出した 45 個の慣用句それぞれの文字通りの意味と慣用句的な意味を定義した。慣用句の文字通りの意味は個々の構成要素の意味を組み合わせたものと考えられるため、『明鏡国語辞典 第 2 版』（2010）を参考に、個々の構成要素を辞典において調べ、それぞれの見出しから 1 番目に載っている意味を抽出した上で文字通りの意味を合成させた。例えば、「腕を振るう」の文字通りの意味を作成する際に、まずは「腕」－「肘と手首の間」、「振るう」－「振り動かす」という二つの意味を抽出し、その後二つの構成要素の意味によって「肘と手首の間を振り動かす」という文字通りの意味を合成させた。一方、慣用句的な意味に関しては 3.3.1 に述べた 2 冊の慣用句辞典から、学習者にとって理解しやすいと判断したほうを定義に用いた。更に、45 個の慣用句の中に学習者にとって親密度の低いものもあるゆえ、慣用句全体の意味をよりよく協力者に理解させるために、全部の慣用句に対して例文を提示することにした。慣用句の例文も 3.3.1 に述べた 2 冊の慣用句辞典から理解しやすいと判断したほうを用いた。実際にアンケートで提示した意味及び例文の具体例を 3.3.3 に示す。

### 3.3.3 アンケート

本稿は Nippold & Rudzinski (1993)、Ishida (2009) 及び Aljabri (2013) を参考にアンケート調査を行った。アンケートは説明文とタスクから構成される。タスクにおいて、慣用句の文字通りの意味、全体としての意味及び例文を提示した後に、透明度判断と親密度判断を順番に協力者に行わせた。タスクの一例を図 1 に示す。

協力者に透明度と親密度の概念を理解させるために、説明文ではそれぞれの概念について具体的に説明し、判断の基準を述べた。また、タスクの部分において、すべての協力者は 45 個の慣用句を同じ順番で見て判断を行った。アンケートの形式に関して、透明度判断タスクと親密度判断タスクを別々に実施しなかったのは、この二つのタスクに対して、同一人の判断が必要とされるからである。Lancers では一回のアンケートで一つのタスクしか公開できず、タスクに参加する協力者を制限することが難しいため、二つのタスクを別々にする場合、協力者を同一人に制限することができなくなる、という問題点がある。また、他にも透明度判断と親密度判断の尺度に関しては、第二言語学習者と母語話者の親密度判断に差があることが予測されるため、母語話者の場合はより慣用句の親密度を高く感じるだろう。従って、親密度判断において母語話者と学習者の違いがより正確に反映できるように、本稿では 7 段階のスケールを用いることにした。更に、本稿では第二言語学習者のグループにおいて、親密度が上がることによって透明度判断も変わるということを考慮し、実験による親密度の影響が避けられるように、透明度判断タスクを親密度判断タスクの前に行うことにした。



(1) 腕を振るう

文字通りの意味：  
肘と手首の間を振り動かす。

慣用句としての意味：  
身につけた能力や技術を存分に発揮する。

例文：  
大勢の来客に母は喜々として料理の腕を振るった。

「腕を振るう」の文字通りの意味と慣用句としての意味の間の関連性はどれぐらいあると思われますか。

1	2	3	4	5
関連性が非常に低い			関連性が非常に高い	

本調査を受ける前に、この表現を見た/聞いたことがありますか。

1	2	3	4	5	6	7
一度も見た/聞いたことがない					よく見る/聞く	

【図 1】 アンケートの一例

### 3.4 調査手順

本稿のアンケート調査は全てオンラインで実施した。協力者のうち、日本語母語話者は日本語サイト Lancers を通してアンケートに協力してもらい、学習者は中国語サイト問卷星 (wen juan xing) を通して回答してもらった<sup>6</sup>。母語話者と学習者に見せたアンケートは同じ内容のものであるが、学習者のための説明文には第一言語である中国語を用いた。アンケートにおいて、まずは説明文をスクリーンに提示し、その後タスクを実施してもらった。タスクは 3.3.3 で示した順番の通りに行った。

## 4. 結果

学習者と母語話者による親密判断タスク及び透明度判断タスクの平均を慣用句ごとにまとめたものは付録に示す。付録の表から分かるように、透明度判断については、学習者グループにおける 45 個の慣用句の透明度平均は 3.21 であり、透明度が一番低いと判断されたもの (1.74) は「泡を食う」と「焼き餅を焼く」で、透明度が一番高いと判断されたもの

<sup>6</sup> 母語話者の協力者には一定の謝金を支払い、学習者には日本語授業の一環として調査に参加してもらった。

(4.22) は「力を入れる」である。母語話者グループにおいては、全ての慣用句の透明度平均は 2.73 であり、透明度が一番低いと判断された (1.40) のは「焼き餅を焼く」で、透明度が一番高いと判断された (4.43) のは「横になる」である。一方、親密度判断について、学習者のグループ平均は 3.81 であり、親密度の一番低いもの (1.83) は「膝が笑う」で、親密度の一番高いもの (5.98) は「身につける」である。母語話者グループの親密度平均は 5.68 で、親密度の一番低いもの (2.26) は「尻が長い」で、親密度の一番高いもの (6.81) は「気をつける」である。母語話者グループに関して、45 個の慣用句に対する親密判断は選出時の予測より高かったが、親密度が低いものもある。さらに、母語話者の親密度は全体的に学習者より高いことも分かる。以上を踏まえると、本稿で用いた 45 個の慣用句は学習者か母語話者かにかかわらず、透明度及び親密度にバリエーションのあるものと言える。

続いて、慣用句の透明度判断及び親密度判断の関係について分析する前に、まずは母語というカテゴリカル要因に日本語母語話者 (= 日) と中国人日本語学習者 (= 中) の二水準を入れた。透明度と親密度の関係及び母語話者と学習者の間の相違を明確化するために、今回は透明度を従属変数に、母語、親密度及び母語と親密度の交互作用を固定効果とし、協力者と慣用句項目を変量効果とした混合線形モデルを仮定し、最尤推定を行った。透明度を従属変数にした理由は、本稿の仮説において慣用句の透明度は親密度が高くなるにつれ変化が見られることにある。データが正規分布になっていることを前提としない点、及び変量効果の推定もできるという点においてメリットがあると考えられ、今回は混合線形モデルを使用することにした (Baayen, Davidson, & Bates 2008)。但し、混合線形モデルに用いられる従属変数は連続変数であることが望ましく、透明度判断タスクの結果は 5 段階評価になり、厳密に言うと連続変数ではないが、評価の各レベルにおける間隔は均等であると考え、今回は透明度の結果を連続変数とみなすことにした。解析には統計ソフト R ver-3.3.0 (R Core Team 2016) を使用し、パッケージ lmerTest ver-2.0.32 (Kuznetsova, Brockhoff, & Christensen 2016) の lmer (ver-1.1.12) 関数及び anova 関数を用いた。後退的選択法 (backward selection) を使用することによって以下のモデルが最尤であることが分かり、考察に用いた。

$$\text{透明度} \sim \text{母語} * \text{親密度} + (1 + \text{親密度} \mid \text{協力者}) + (1 + \text{母語} * \text{親密度} \mid \text{慣用句})$$

【表 1】 混合線形モデルによる分析結果

従属変数	= 透明度					
変数名	回帰係数	標準誤差	自由度	t 値	p 値	
切片	2.20	0.10	72.36	21.06	<.001	***
母語中	0.45	0.17	74.70	2.67	<.01	**
親密度	0.17	0.02	64.77	10.09	<.001	***
母語中*親密度	0.07	0.03	94.03	2.55	=.012	*

$p < .001$  ‘\*\*\*’,  $p < .01$  ‘\*\*’,  $p < .05$  ‘\*’

表 1 は混合線形モデルにおいて推定された固定効果の回帰係数及び  $p$  値をまとめた結果である。表 1 における切片の回帰係数 2.20 は母語＝日の場合、つまり日本語母語話者で、親密度が 0<sup>7</sup>となる時に予測される慣用句の透明度の値である。次の行に示した母語中の回帰係数 0.45 というのは、切片に比較して、母語が日から中に変わる場合、つまり中国人日本語学習者になる場合、親密度が 0 となる時に予測される慣用句の透明度の値は 2.20 より 0.45 高くなることである。そして、この変化が有意であること ( $p < .01$ ) から、親密度が 0 の場合、日本語母語話者 (= 日) に比べ、中国人日本語学習者 (= 中) は慣用句の透明度を高く判断していることが分かった。

三行目の親密度の回帰係数 0.17 は、切片に比べ、慣用句の親密度が 1 点上がると透明度の値が 0.17 上がることを表す。言い換えれば、日本語母語話者 (母語＝日) の場合、親密度が 1 点上がることによって、透明度判断も 0.17 高くなる ( $p < .001$ )。このことから、日本語母語話者は慣用句の親密度が高いほど透明度判断も高くなると言える。

更に、母語と親密度の交互作用は 4 行目に示されている。回帰係数 0.07 は、母語＝日の場合に比べ、母語が中国語に変わる時に、親密度が 1 点上がることによって変化する透明度の値は前者より 0.07 高くなることを表している。つまり、日本語母語話者の場合、親密度が 1 点上がることによって、透明度判断も 0.17 高くなるのに対し、中国人日本語学習者はその上更に 0.07 高くなる。まとめると、学習者の場合、親密度が 1 点上がると、透明度判断は 0.24 ( $0.17 + 0.07$ ) 高くなる ( $p = .012$ )。この交互作用が示すように、中国人日本語学習者の場合、親密度が高くなるにつれ、透明度判断も高くなる上、この変化は日本語母語話者の場合よりも顕著である。

## 5. 考察

表 1 の結果から分かるように、中国人日本語学習者の場合、慣用句の透明度判断はその慣用句の親密度に影響され、親密度が高くなるほど透明度判断も高くなる。従って、仮説 1 は検証されたと考えられる。

Keysar & Bly (1995) は 0～2 回の使用頻度を要因として、実験で学習した慣用句の使用頻度とその慣用句の意味の透明度、またそれと反対になる意味の透明度の関連について分析を行った結果、使用頻度が高くなると後者は低くなるのに対し、前者は使用頻度の影響が意味の透明度に見られなかった。この実験で用いられた慣用句は現代の英語母語話者にとって知らないものであるため、使用頻度を増やすことによって慣用句的な意味の処理を協力者の脳内で繰り返させる方法が用いられたと考えられるが、日常生活で遭遇する慣用句に関しては、使用する時だけでなく、見たり聞いたりする際にも慣用

---

<sup>7</sup> 親密度判断は 1～7 の 7 段階評価で、0 の値がないが、モデルによって推定される回帰線は  $x = 0$  の時から始まるため、一番低い値を 0 とみなしている。

句の意味を脳内で処理しなければならない。そして、母語話者か学習者かにかかわらず、慣用句を見たり聞いたりする頻度は使用する頻度よりも高いと思われる。本稿の対象とした慣用句には見聞きする頻度が高いものもあるため、使用頻度だけでなく、親密度<sup>8</sup>という概念を用いて実験を行った。そして、予測通り、親密度が高くなることで透明度判断が高くなることが検証できた。

透明度は慣用句の文字通りの意味と全体の意味を知っている人から見て、両者の間にどの程度の関連性があるかを表す概念であるため、仮説①を「一人の学習者はある慣用句に遭遇する機会が増えると、次第にその慣用句の文字通りの意味と全体の意味の間に高い関連性を感じるようになる」と解釈できる。慣用句は文字通りの意味から全体の意味を推測しにくいという特徴があるため、学習者が未知の慣用句に遭遇すると、文字通りの意味から全体の意味を理解しようとするのが困難であると思われる。そのため学習者にとって慣用句の意味を一つの語彙と同じように覚えなければならないと考えられる。しかし、学習者はその慣用句的な意味を覚えた後に、慣用句の文字通りの意味と慣用的意味について考え、その間に関連を作ることができる (Keysar & Bly 1995)。さらに、今回の結果が示すように、慣用句の文字通りの意味とその慣用句的な意味の間に関連を作るプロセスが繰り返せば、二つの意味の関連性は次第に高まり、慣用句の透明度判断も高くなると考えられる。言い換えれば、学習者はある慣用句に遭遇すると、文字通りの意味と全体の意味について分析し、両者の間の関連性を見出そうとするプロセスを経験するため、親密度が上がるにつれて次第に透明度も高く感じるのである。

続いて、表 1 の結果からみると、日本語母語話者の場合においても、親密度が透明度判断に影響を及ぼし、親密度が高くなるにつれ、透明度判断が高くなった。従って、仮説②は検証されなかった。本稿の仮説では、母語話者は教室環境において第二言語を勉強する学習者と習得のプロセスが異なるため、意図的に慣用句を学習するのではなく、日常生活において自然に表現の意味を身につけると考え、親密度によって透明度が高くなることはないかと予測していたが、今回の結果を見ると、母語話者は慣用句の習得において学習者と類似するプロセスを経ていると考えられる。つまり、母語話者の透明度判断が親密度によって高くなる理由は、学習者と同様に、ある慣用句の意味を学習した後に、その文字通りの意味と慣用句的な意味の間の関連性を見出そうとするプロセスを繰り返していることにあると考えられる。Nippold & Rudzinski (1993) は高校生に比べて大学生は慣用句の親密度が高く、慣用句の透明度を低く判断することを挙げ、その違いについて、大学生は慣用句の意味を一層知っていることから、慣用句の表現形式と慣用句の意味の結びつきが定着し、文字通りの意味へアクセスしにくくなると述べている。これは本稿の考察とは異なっており、また、透明度と親密度の相関について分析を行な

---

<sup>8</sup> アンケートでは慣用句を見たり聞いたりする頻度を基準にしているが、慣用句を使用する際 (書く/話す) もその慣用句を見たり聞いたりしていると考え、慣用句の親密度を定義する際は使用することも含め、「ある表現に遭遇する頻度」にした。

っていないという点において再検討する余地があると考えられる。

一方、母語と親密度の交互作用が有意であったため、中国人日本語学習者の場合、親密度が透明度判断に及ぼす影響は日本語母語話者の場合より顕著であると考えられる。つまり、学習者と母語話者は全く同じ習得のプロセスを経ているとは考え難く、学習者は慣用句の構成要素と慣用句的な意味の間を関連づけるという思考プロセスがより活性化されていると言えよう。具体的に考えると、学習者グループにおいて、今回の調査に参加した協力者は全員日本への留学経験がない人で、日常生活で日本語に触れる機会が少なく、主に教室の中や、限られた環境の中でしか日本語を見聞きせず、十分に慣用句を使用することができないと考えられる。尚、協力者は全員日本語を専攻としていることから、普段から日本語の知識に関するテストや課題が課され、日本語表現に触れる際にそれらを正しく理解し、使用できることを目的とするため、意図的に日本語を学習している点においては特徴的であると考えられる。それに対して、日本語母語話者グループは19歳以上の大学生か成人であり、日常生活で常に日本語でコミュニケーションをとっている。母語話者は学習者のように強い学習意識がなく、正確に表現を理解し、使用するという目的も持つわけではないと考えられ、年齢の増長につれて自然に慣用句表現が身につくという点は学習者と異なる。

Schmitt (2000:120) が述べるように、偶発的学習（自然習得）に比べ、意図的学習における語彙の情報の処理はより深い。このことから、母語話者と学習者は両方上述の思考プロセスを経験していると言えるが、学習者の場合は意図的学習により、慣用句の文字通りの意味と慣用句的な意味の関連を深く処理しているのに対し、母語話者は意識的にこのプロセスを経ておらず、学習者ほどプロセスの活性化がされていないことが考えられる。ただし、学習者か母語話者かにかかわらず、個人の学習スタイルの違いによって、日常でよく日本語に接触する学習者もいれば、日本語慣用句に興味があって、意識して慣用句を学習する母語話者もいる可能性がある。今後の研究ではより協力者の性質を統一する必要がある。

最後に、従来の研究において、透明度の高い慣用句または親密度の高い慣用句は低いものより母語話者と第二言語学習者にとって理解・解釈しやすいこと明らかにされていたが (Nippold & Rudzinski 1993 ; Nippold, Taylor, & Baker 1996 ; Aljabri 2013) 、今までこの二つの要因を別々に捉える研究が多く、その要因の関連性について述べているものはない。本稿の考察を踏まえると、慣用句の透明度と親密度は完全に独立しているものではなく、母語話者か学習者かにかかわらず、慣用句の親密度が高くなればその慣用句に対して文字通りの意味と全体の意味との関連性も見出しやすくなり、慣用句の透明度が高くなることが示された。このことから、この二つの要因が慣用句の習得プロセスに及ぼす影響について検討するには、二つの要因の関連性について考えなければならない。慣用句に遭遇する機会が増えると、その慣用句について考えるプロセスの繰り返しによって、慣用句の透明度も高く感じるようになるため、親密度が高くなるほ

ど、慣用句の理解・解釈プロセスが促進されると考えられる。ただし、慣用句的な意味と構成要素本来の意味との関連性については、様々な段階を設定することができる。その程度を判断するのはある程度主観的ではあるが（伊藤 1999）、透明度は個々の慣用句が持つ性質の一つであり、本来なら透明度の低いものは親密度が上がることで、透明度の高い慣用句と同じ程度に文字通りの意味と全体の意味の関連性が見出しやすくなることはないと思われる。そこで、慣用句全般を見ると、透明度判断は親密度によって変わることが今回の調査で明らかになったが、今後は透明度の低い慣用句と高い慣用句を分けて考察し、透明度判断の変化には慣用句の種類による要因が影響するか否かについて更に検討する必要がある。

## 6. まとめと今後の課題

本稿では、日本語母語話者と中国人日本語学習者を対象に、日本語慣用句に対する透明度判断及び親密度判断を行うことによって、慣用句の透明度と親密度の間に関連性があるか否かについて検討し、①教室環境において第二言語を勉強する学習者の慣用句習得は意図的な学習であるため、慣用句の親密度が上がるにつれ、透明度も高くなる、②母語話者の慣用句習得は自然習得であるため、親密度が高くなっても、透明度は高くない、という二つの仮説について検証を行った。

結果、慣用句の透明度判断及び親密度判断の関係について、母語話者と学習者は同じ傾向を示し、親密度が上がることによって透明度も高く判断することが分かった。一方、学習者においては、親密度による透明度判断の変化が母語話者より顕著であった。その理由は、両者の慣用句の習得過程に違いが見られ、学習者は意図的な学習をしているため、自然に習得している母語話者より慣用句の意味について考えるプロセスが活性化していることにあると考えられる。

さらなる習得過程の違いを検証するために、今後は国語を学んでいる中学生・高校生の日本語母語話者、及び日本で生活し、日常生活で日本語を用いる留学生のデータも必要である。前者は本稿の日本語母語話者と比べ、より意図的に日本語表現を学習していると考えられ、後者は本稿の学習者より自然に日本語を習得していると考えられる。また、5節の最後に述べたように、透明度の性質（高低）別に透明度判断の変化を観察し、それが慣用句の親密度に影響されるかどうかについて、今後も検討しなければならない。

### 【参考文献】

- 石田プリシラ（2004）「動詞慣用句の意味的固定性を計る方法：統語的操作を手段として」『國語學』55(4), pp.42-56.
- 伊藤眞（1997）「言語の具象性・比喩性・受動性一日・独慣用句をめぐって」『ヴォイスに関する比較言語学的研究』pp.249-297.
- 伊藤眞（1999）「慣用句の意味の成立要因について」（加藤慶二先生・洲崎恵三先生退官記念号）

- Rhodus: Zeitschrift für Germanistik*, 15, pp.185-197.
- 宮地裕 (1985) 「慣用句の周辺—連語・ことわざ・複合語—」『日本語学』4(1), pp.62-75.
- Aljabri, S. S. (2013). EFL Students' Judgments of English Idiom Familiarity and Transparency. *Journal of Language Teaching and Research*, 4(4), pp.662-669.
- Baayen, R. H., Davidson, D. J., & Bates, D. M. (2008). Mixed-effects modeling with crossed random effects for subjects and items. *Journal of Memory and Language*, 59(4), pp.390-412.
- Ishida, P (2009). The effect of transparency on L2 idiom interpretation. *Tsukuba Journal of Applied Linguistics*, 16, pp.15-30.
- Keysar, B., & Bly, B. (1995). Intuitions of the transparency of idioms: can one keep a secret by spilling the beans? *Journal of Memory and Language*, 34(1), pp.89-109.
- Kuznetsova, A., Brockhoff, P. B., & Christensen, R. H. B. (2016). lmerTest: Tests in Linear Mixed Effects Models. R package version 2.0-32.  
<https://CRAN.R-project.org/package=lmerTest>
- Liu, D. (2008). *Idioms: Description, comprehension, acquisition, and pedagogy*. New York: Routledge.
- Nippold, M. A. & Rudzinski, M. (1993). Familiarity and Transparency in Idiom Explanation: A Developmental Study of Children and Adolescents. *Journal of Speech, Language, and Hearing Research* 36(4), pp.728-737.
- Nippold, M. A. & Taylor, C. L. (2002). Judgments of Idiom Familiarity and Transparency: A Comparison of Children and Adolescents. *Journal of Speech, Language, and Hearing Research* 45(2), pp.384-391.
- Nippold, M. A., Taylor, C. L., & Baker, J. M. (1996). Idiom Understanding in Australian Youth: A Cross-Cultural Comparison. *Journal of Speech, Language, and Hearing Research*, 39(2), pp.442-447.
- R Core Team (2016). R: A language and environment for statistical computing.  
 R Foundation for Statistical Computing, Vienna, Austria.  
 URL <https://www.R-project.org/>.
- Schmitt, N. (2000). *Vocabulary in language teaching*. Ernst Klett Sprachen.
- Titone, D. A., & Connine, C. M. (1994). Descriptive norms for 171 idiomatic expressions: Familiarity, compositionality, predictability, and literality. *Metaphor and Symbol*, 9(4), pp.247-270.

#### 【辞書】

- 北原保雄(編) (2010) 『明鏡国語辞典 第2版』, 大修館書店
- 三省堂編集所 (2010) 『三省堂 故事ことわざ・慣用句辞典 第二版』, 三省堂
- 東京書籍編集部 (2014) 『慣用句・故事ことわざ・四字熟語 使いさばき辞典』, 東京書籍

【付録 – 学習者と母語話者による新密度判断タスク及び透明度判断タスクの平均】

	透明度		親密度	
	中国人日本語学習者	日本語母語話者	中国人日本語学習者	日本語母語話者
1. 耳に入る	3.57	3.68	4.46	5.57
2. 腕を振るう	3.04	2.70	4.02	6.02
3. 目がない	2.48	1.62	3.93	5.89
4. 気をつける	3.93	3.53	5.87	6.81
5. 声を殺す	3.91	3.43	3.28	5.28
6. 畑が違う	3.61	3.00	2.24	4.96
7. 胸がいっぱいになる	3.76	3.51	4.22	5.89
8. 泡を食う	1.74	1.74	1.85	4.34
9. 腹が立つ	2.72	1.62	4.93	6.74
10. 馬が合う	2.67	2.62	2.30	5.62
11. 力を入れる	4.22	3.43	5.00	6.40
12. 肩を持つ	3.52	2.53	3.93	5.85
13. 馬鹿にする	4.15	3.21	5.28	6.57
14. 足が出る	2.30	1.66	3.24	4.47
15. 気を配る	3.54	3.49	4.67	6.38
16. 油を売る	1.96	1.64	2.57	5.70
17. 首にする	2.70	1.81	4.93	6.43
18. 舌が肥える	2.96	2.38	3.30	5.55
19. 弱音を吐く	3.43	3.57	3.24	6.28
20. 尻が長い	2.41	1.62	2.35	2.26
21. 手に乗る	2.50	2.02	3.28	4.96
22. 影が薄い	3.91	3.09	3.24	6.04
23. 身につける	3.93	3.74	5.98	6.55
24. 焼き餅を焼く	1.74	1.40	2.93	6.40
25. 目を通す	3.78	2.53	4.96	6.51
26. 赤の他人	2.15	2.26	2.91	6.26
27. 手を貸す	4.13	3.30	4.87	6.40
28. 横になる	4.15	4.43	5.04	6.49
29. 気が済む	3.24	4.00	4.15	6.28
30. 手を打つ	2.46	1.96	3.59	5.66
31. 面倒を見る	3.20	2.49	4.37	6.06
32. 泥を吐く	2.70	2.13	2.26	3.45
33. 気にする	3.63	2.96	5.78	6.62
34. 骨が折れる	3.37	2.49	4.09	5.53
35. 気が重い	3.98	3.36	4.96	6.06
36. 肩を入れる	3.04	2.09	3.24	4.49
37. 白を切る	2.15	2.00	2.00	5.51
38. 膝が笑う	2.48	2.26	1.83	5.00
39. 気に入る	3.72	3.13	5.41	6.53
40. 後味が悪い	3.98	3.72	3.09	6.09
41. 食が細い	3.54	3.74	2.98	5.79
42. 荷が勝つ	3.28	2.47	2.35	2.45
43. 懐が寒い	2.83	2.17	3.00	5.64
44. 話に乗る	3.89	2.72	4.13	5.62
45. 口にする	4.07	3.74	5.35	6.19
平均(Mean)	3.21	2.73	3.81	5.68
標準偏差(SD)	0.71	0.78	1.16	1.00
範囲(Range)	1.74-4.22	1.40-4.43	1.83-5.98	2.26-6.81